





世尊寺法書白卷第八

十一代行房朝臣書

上毛町田清興審定

極東共二日切米

君物事其深

思乞作之今

清淨為道

心結作枯木

二日清淨切

定心見物

板教八口所修卦

為未活元久長三

條東洞位者為三

者仁了存向

存心思令古立作書

之恒存以記之

述心事以他事

以面釋其意

海

好子方里外  
法年亦名家  
之

たもいそりなるあしあまをえ  
る乃いそりなるあしあまをえ

よかんら次

君やこー我やゆいんすしあ次

ゆかんらうらうねてうそかかしく

かー

ちりらりの柳

かじくゆん乃やみよあ次

ゆかんらうらうねてうそかかしく

題ー次

よかんら次

世えちのやみ乃うらうねてうそかかしく

ゆかんらうらうねてうそかかしく

さよふうてあふ乃とまらる月

あかたも君をあらみうらう



かきまきふらふら山吹花の朧  
あらくきたるは

惠愛法師

やまふき乃ん乳のさかまふゆしよき

これこそ人あるわぬ(まこころ)

扇風多。色とすき

これまいりるるめつ楚女(山吹の)

十二代 從三位行尹卿書

清  
洛  
曉  
光  
鋪

玉  
簪  
子  
ら  
海  
霜

茶券 紅梅

あ の ぐ ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

ち

ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

ち

かきくつしん

かきくつしん

かきくつしん

かきくつしん

かきくつしん

詠五首和歌

権律師定孫

初冬雨

いづつのも冬はまゆと物のかきくつ  
風も吹あふくさくさく

あき

ありてはそめいせりてはそめい  
のりてはそめいせりてはそめい

思恋

しるはれぬ心はなほ人  
あはれやと乃てはそめい

思逢恋

閑もわづらひてはそめい  
又ゆきて人かた

袿祇

あはれはそめいせりてはそめい  
おはれはそめいせりてはそめい

大和國橘樹寺大勸進沙門

聖七敬白

請旨蒙十方檀那助成  
修管上之聖德大依庇成

復意其甚公加新造每興行遇  
轉法會等除自他第二利益  
致國家太平護持扶

右中天有釋迦牟尼之聖現

三子世果向利見切 存躬有  
聖德太子之應迄七百餘歲  
爛正始音蓋占神秀乃宮監之  
國主必耀大權深佑之威光  
者也爰檣樹寺者降詔右茲  
須比靈毗園之初度演暢  
表瑞範觀象紀場之化儀千  
佛涌布之舉為慧高顯四

萬續紛之地教者香由於殘救  
世觀音之像者容也雕刻不  
似凡平

光明皇后之賜 勅語也

穀自具不銘又加之百濟奉  
經權之書實一之納且可謂  
就之仙舍利太子所筆之般若  
釋門教門之圖與秘矣豈非

帝道王道之統護字義同  
自性常任之理隨處變遷  
造化運轉之形似有新故  
露法霜來松柏遂老穠  
階玉之塵安若日易侵佛像  
安買之金龜僧侶心任之室  
深更斬白海月繞續長明  
燈之輝孤禱山寒徒出風空



傳身夜鐘之響音視聽寐寔  
意至傷嗟但興廢有有時  
之故屢歷終始大劫難成之  
故復劫傾頽展轉到今幸  
逢 皇化一統之大業  
綉及廣宣之化運再昌之  
佳期也願聖主之小量只  
作天之意之遙遠既任乘前

之例忝精官裁之 宣公

義如斯我敢曷滯矧之十

七箇條之憲法者政教之大  
中達道之在四十六所之依

蓋者善根之快切思德之

五聖君賢臣之定其

訓編責之賤莫不載彼思

諸宗之聖觴大業之流布与

日月俱懸在天地充塞玄  
俗舉為靈液載難人運鍊  
報酬凡屬烹割新造之區心  
累法之云舞未之繁榮等勤  
在別紙粗探大總精舍夾和  
王簡樞之碑要添又字誦  
場壯藝曹子達之噴將妙  
曲調伏惟

龜山聖皇所字鳳曆弘  
安之紀古家卷而達早聽官  
使君之說其處廢刺行

三十海被其其好一寶相教

多之起傳者義疎物惣為害

之源源流遠根固枝茂福

罪海之源波瀾廣湛切德

林之根花菓同結方集

天下之善宜除人而之益  
汝城之萬戶子門樓閣隨和  
邦國之五畿七道鏡谷等  
辭寸鐵尺木之力櫛櫛正隆  
樓條閣之其基稼穡拾美  
之次員投補梵席存造之鼓  
小因大果誠至感生然則  
在之厥之契為給孤長者

之信心刺之塵之唱起妙  
莊嚴王之志識傳薰薰所及  
徧界不藏佛法是法之無  
為安樂速致鴻範五福  
之康寧善男善女之德遇  
結緣未始就華三會之得  
朕仍勅進此件教白

遠武二年十月日

沙門聖云

寬政八年丙辰六月五日

毛持田循勒成好古堂

